瑷（あい）

光耀抄 …… 2
琥珀集 …… 6
瑠璃集 …… 12
瑪瑙集 …… 22
紅玉集 …… 24
６月号月評 …… 26
恵贈句集拝見 …… 28
恵贈俳誌拝見 …… 30
特別作品「早春の旅」…… 32
琥珀集作品鑑賞 …… 34
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ …… 35
Ⅱ …… 36
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞 …… 37
俳誌交歓 …… 39
句集山ざくらへの反響 …… 40
他誌転載 …… 42
葛城古道 …… 43
姫の国父の蒼天（15） …… 44
堺まちあるき吟行 …… 46
ひこばえ通信（２） …… 48

2010/６　第51号

今月の一句

ほととぎす雲に孤独の濡るるとき　桂　樟蹊子

（昭和六十一年作）

木曽路の雨霧のなかをひとり馬籠へ歩かれた時の作品である。雨霧の山辺の中からほととぎすが聞えてきた。たまたま旅は孤独であると思っていた師は、ひとしお孤独に胸が一杯になったことであろう。

「孤独の濡るるとき」の措辞が樟蹊子独特の表現であり、懐かしくこの句を拝見した。

隆子

PDF= 俳誌の salon

大江山

塩路隆子

料峭の丹波山並み雨煙り

手入れよき庄屋なごりの松の花

樹々芽吹く京街道のをんな滝

行くほどに深き春雪奥丹波

茅葺きを覆ふ淡雪軒しづく

ゆくりなし春雪霏々と鬼の郷

幾百の鬼面にすくむ余寒かな

あたたかや酒呑童子の湯に浸り

なごり雪窓に銘酒の鬼ころし

辞すときも残雪凛と大江山

PDF= 俳誌の salon

六月号光耀抄

塩路　隆子選

竹内　悦子
鴉とて食べてゆかねば田螺鳴く

藤見佳楠子
全麻てふ未知の幻想春の闇

小澤　菜美
花筏ひと夜泊てたる神の池

杉本　綾
病むまいと心に箍や花の冷

西田　史郎
をんな声近づいてくる朧の夜

山口キミコ
高瀬川一の舟入桜舞ふ

新実　貞子
啓蟄や赤い花苗求めねば

中川すみ子
棚田守る一本桜神々し

宮田　香
念入りに押す印鑑や新社員

坂根　宏子
馬頭琴の音色響けり花吹雪

増田　一代
豪快に男の料理初鰹

北尾　章郎
正社員てふ名の序列花筵

吉田　晴子
戦中派の読めぬ英字や山笑ひ

笠井　清佑
花見頃計りかねたる低気温

PDF= 俳誌の salon

児の担ぐフランスパンや山笑ふ　阪本　哲弘
回転椅子くるりと医師の大マスク　岡　佳代子
花明りジャンパースカート嬰に似合ひ　大松　一枝
独活室に満つる香りや耶蘇の邑　田下　宮子
花冷に押せり会計監査印　伊東　和子
入口も出口も桜吉野かな　塩路　五郎
桃摘花の農婦と交す二た三言　川崎　利子
反り深き東寺の塔のおぼろなり　清水侑久子
単線の出発進行山笑ふ　三川美代子
野遊びの親子川見て帰りけり　片岡久美子
味噌蔵へ春日一すぢ土間白む　小西　和子
漁休み磯菜摘みゐる蜑の午後　井口　淳子
遷都祭広き宮址に青き踏む　小林　成子
子供らは嬉々と広場にシャボン吹く　坂上　香菜
花を見し後の冥さや女人堂　鈴木　照子
ティンカーベルになり損ねたる落花かな　森下　康子
春光や存在確と石舞台　前川ユキ子
止め処なき涙溢るる入園日　土井くみこ
菜の花の囲む学校作法室　松岡　和子
ミシガンの琵琶湖クルーズ花三分　松田　和子

春の野辺おにぎり飯がよく似合ひ　松田とよ子
石臼や母が自慢の蓬餅　宮崎左智子
旅すれば美し日の本花絵巻　和田森早苗
チューリップ奏でてゐるよわらべ唄　秦　和子
フリスビーの気儘なりけり春の風　長濱　順子
飾る雛なけれど夕餉散らし寿司　難波　篤直
春うららピザ焼きて子を待ちわびる　能勢　栄子
春暁を叫びて鳥の横切れり　高谷　栄一
菜花摘む農婦の姿夕茜　竹内喜代子
蹲の水晶光る春日和　田中　芳夫
爛春やカンバスに描くセミヌード　辻　香秀
透し絵のごとき竹生島や遠霞　冨田ヒナ江
比良八荒竹生島をも流さむと　笹井　康夫
菜の花や遠く近くに農婦見え　桂　敦子
奥千本古代遺産の花の妍　紀川　和子
流さるる雛になまめく禊ぎ川　粟倉　昌子
春雷や嬰の泣き声凄まじき　五十嵐　勉
春雷の威厳に似たる親父かな　泉　秀行
並木みな千手観音風光る　伊藤　憲子
ほろ酔になりたき気分月おぼろ　伊庭　玲子

PDF= 俳誌の salon

黒スーツ揃ひ神妙入社式　宇治　重郎
一斉に空を指しをり花辛夷　宇治原弥幸
池の辺を花よ花よと巡りけり　大島みよし
門前に一日一訓雪柳　落合　晃
春灯下脳トレ効果信じつつ　和田　郁子
いと易くフビライ乗せて蒙古風　安本　恵子
畑に立つ春耕人の忘れ鍬　山本　孝夫
木屋町の花影にあり茶房の灯　横田　矩子
永日の甲板に海向きの椅子　吉田　希望
巣立つ子の背中押すごと春の風　田所　昌代
吾子抱きて父に逢ひたや竹の秋　竹永　和代
山風をひと日纏へる糸桜　辻　知代子
四代が揃ふ楽しみ花筵　三原　利枝
葉桜のピンクのかけら手で包む　村田　望
かぜふいてさくらのシャワーきれいだな　森下　千聖
よざくらがライトにあたりひかってる　土井ほのか
あたらしい一年生がきましたよ　廣瀬まさや
春の月みたいなおこのみ食べました　塩路　彩奈
菜の花の黄色じゅうたんかおりつき　廣瀬　結麻
的ねらい春雨の中弓を引く　高野　綸

琥珀集

いのち運ぶ

藤見佳楠子

全麻てふ未知の幻想春の闇
夜半覚めて独りの闇に冴返る
春暁の「もう大丈夫です」執刀医
病窓へ燕がいのち運び来る
空白の記憶を紡ぐ春の刻
春光や主治医の顔に笑みこぼれ
屋上の試歩を励ます遊蝶花

田螺鳴く

竹内　悦子

堺にて茶人のここち桜餅
晶子歌碑へチンチン電車長閑なる
烈士の碑永遠に遺りて花辛夷（妙国寺）
桃の花女らしさに憧がるる
花の昼遺影の母とティータイム
約束反故想定外の春の雪
鴉とて食べてゆかねば田螺鳴く

紫木蓮

小澤　菜美

花筏ひと夜泊てたる神の池
産土神の花満ち満ちし荘厳さ
花の雨貨車はいつもと違ふ音
若鮎の育つ湖畔へ戻りけり
田蛙の声それきっり闇甘き
クレソンに細胞醒ます朝の卓
紫木蓮宙へ飛ばむと咲きにけり

PDF= 俳誌の salon

花冷

杉本　綾

栄転と云へど遠しや花杏
病むまいと心に箍や花の冷
ふんはりとロールケーキやスイトピー
こぼれ種見事に咲けり桜草
春耕や亡夫をまねしか畝曲り
黄塵の雨に新車の縞模様
招かれて薄茶点前の桜もち

花に酔ふ

西田　史郎

をんな声近づいてくる朧の夜
法要や花は去年と変らざり
花の宴何故か淋しき軍歌かな
天鵞絨の感触のこる猫柳
花に酔ひ人に酔うての上野かな
春潮に八十の歳月氷川丸
四阿にあまた人呼ぶ糸桜

ふるさと

山口キミコ

ふるさとの海へ向く墓涅槃西風
雨霽れて雫煌めく木の芽かな
川堤つくし一群れ背くらべし
寒暖に桜ちらほら迷ひけり
高瀬川一の舟入桜舞ふ
花見客流れが龍馬史跡訪ふ
彼岸なるふるさと恋し父母恋し

お一段

新実　貞子

誤登録の携帯電話（けいたい）しきり四月馬鹿
一樹ただうすもも色に花あんず
啓蟄や赤い花苗求めねば
揚げ物にふんはりと盛り春キャベツ
表彰のメダル燦然春の宵
梅見頃露店に並ぶこんぺいたう
青き踏み見知らぬ児らとお一段（ゴム跳び）

PDF= 俳誌の salon

竹の秋

中川すみ子

花嫁の父の泪へ春の薔薇
愛犬のリール伸して春野行く
デパートの屋上花壇雀の子
警察の敷地真っ新犬ふぐり
霾りて山河一色近江かな
朱の門を潜れば羅漢竹の秋（石峰寺）
棚田守る一本桜神々し

花吹雪

宮田　香

星なほも鋭き光春寒く
花吹雪旧街道を横断す
ふるさとへ向ふ機体や鳥曇
花菜咲き猫のユキちゃんかくれんぼ
メルアドの交換忙し新学期
念入りに押す印鑑や新社員
霾や古代の人の夢連れて

春の鳶

坂根宏子

春泥を踏みて鵯越の径
行く程に椿濃くなる杣の道
春の鳶ゆるり輪を描き漁港
翡翠のトルコブルーや春の池
鳥たちが花よ花よと戯るる
狛犬を枝垂桜が撫でてをり
馬頭琴の音色響けり花吹雪

クラス会

増田　一代

うららかや山間走るねこ電車
ふるさとに残る紫雲田児らの声
永き日や友待つ里へひとり旅
春宵の話やうやく「ほなまたね」
恋猫に負けぬ合唱クラス会
単線の鄙びた里の桜かな
豪快に男の料理初鰹

PDF= 俳誌の salon

カメラワーク

北尾章郎

甲斐の無き姥の説教浮かれ猫
訃の報の面影遠し花すみれ
古址うららイマジネーション掻き立てて
しばらくは町の標や花ミモザ
美女を追ふカメラワークや浪速場所
鐘おぼろ会話途切れし旅の人
正社員てふ名の序列花筵

戦中派

吉田　晴子

滔々と流るる疏水比良八荒
堂跡の百年杉やみどりの日
戦中派の読めぬ英字や山笑ひ
医通ひの道選びゆく花の頃
連翹の彩惜しみなき厨窓
合格の電文一語サクラサク
ゆくりなき春霞屋根を叩きけり

花の門

笠井清佑

ご近所が一つになりし花見酒
花見頃計りかねたる低気温
桜蘂徒に降る佐保の川
友偲ぶ西行庵の花影に
一輪車捨て置かれたり花の庭
ランドセル音にて抜けし花の門
草叢を掴めば匂ふはこべ草

地虫出づ

阪本　哲弘

児の担ぐフランスパンや山笑ふ
花束を受くる船頭卒業期
賑やかな巫女と出遇へり蛇出でて
おもむろに原潜浮上霞む沖
地虫出づ基地が来るぞと急ぎたる
七人の敵の残党花筵
わが句集貸出し中や梅ふふみ（図書館）

PDF= 俳誌の salon

花見鳥

岡　佳代子

貫禄のプリマドンナや花見鳥
廻転椅子くるりと医師の大マスク
春光や道草の子の竹の笛
ひとひらの落花を享けし酒杯かな
イヤリング頷いてますうららなり
晴ればれと空すき間なき芽吹きかな
幾曲り花菜明りの嵯峨の川

桜

大松　一枝

ひいらぎの小花可憐や夕明り
あすか野の風ひかりけり庭めぐる
陽のぬくみ負ふ児と蒔けり花の種
まなうらに花の吉野を描きをり
春の日の心のひまに嬰と遊ぶ
花明りジャンパースカート嬰に似合ひ
わが庭に初音しきりや朝たのし

花の精

田下　宮子

花の精出さうな古木夕篝
夜の海に光怪しき蛍烏賊
ふる里の名を持つ力士春相撲（隠岐の海）
花の昼加賀の老舗に「あめ」のれん
玉椿昔の恋は輝けり
コラボせる一茶とちひろ囀れり（ちひろ館）
独活室に満つる香りや耶蘇の邑

花の山

伊東　和子

花冷に押せり会計監査印
花の山古刹の塔の見え隠れ
再会の面ざし揺るる春ショール
黄塵の中に沈みし今朝の街
沈丁の風が誘へる忙中閑
町佗びし近衛銀座に春の雨（左京区）
産土の磴にはじまる梅の白

PDF= 俳誌の salon

花に花

塩路　五郎

春光へ肢体伸べたる太極拳
花に花重ねて空を埋め尽す
花の下「桜に錨」口ずさみ
つちふるや街は水墨画のやうに
入口も出口も桜吉野かな
ライト受け紙片の如く散る桜
黄沙降る鴎尾の眼に涙かな

桃摘花

川崎　利子

土筆野の鎮守の神の百度石
初音聴き奥の社へ野辺の径
牛明神春の水音蕩蕩と
桃摘花の農婦と交す二た三言
春の鳩鳴き声しきり久米田池
びんづるを撫でて安らぐ花の寺
日の永き寺苑閑まる素十句碑

山笑ふ

三川美代子

卒業子の夢は無限よよーいどん
単線の出発進行山笑ふ
招かぬに遥か砂漠の黄砂かな
異変とも街を包める春の霧
ビル街を春一番が駆け巡る
菜種梅雨湖鈍色の日々続く
新社員瞳きらりと夢語り

日向ぼこ

清水侑久子

猫一族額寄せ会ひ日向ぼこ
反り深き東寺の塔のおぼろなり
ゆくりなき夢に目覚むや春寒く
おだやかに暮るるひと日や春茜
梅日和仮名文字展の雅かな
ガラス越し芽吹き明るき厨窓
このあたり志賀の旧跡よもぎ摘む

PDF= 俳誌の salon

六月号月評

塩路　隆子

今月は久しぶりに琥珀集を鑑賞してみようと思う。いい句が揃って、さてどれに焦点を合わそうかと迷うばかり。嬉しいことである。わくわくしながら評をさせていただいた。

鴉とて食べてゆかねば田螺鳴く　竹内　悦子

生き物はすべて食を摂ることによって生命を保持できる。最近とみに増えている鴉もその通り。夕焼け空を塒へ急ぐ数えきれない鴉の群をみると、ヒッチコックの世界さながらの景、気味悪くさえ感じることがある。また鴉は死臭に集まるとかで、丹波の田舎では朝はやくから鴉が鳴くと「験が悪い」「今日は誰にお迎えが来るだろう」とか「あそこのお年よりが今日くらい亡くなるのではないか」などと嫌がったものである。幼い頃からそう言われて育ったものだからどうも鴉には馴染めない。そこで掲句に戻ってみよう。しかし鴉も生きてゆかねばならない。弱肉強食の動物の世界であればなお更のこと、「鴉とてたべてゆかねば」である。雑食であるが肉は殊に好きな様である。田螺などは恰好の食べ物であろう。「田螺鳴く」の季語が句を引き締めている。

全麻てふ未知の幻想春の闇　藤見佳楠子
病室へつばめが命運び来る　〃

作者はこのほど胆嚢摘出の手術を受けられた。その知らせを受けたのが、手術後三日目、「初めての全身麻酔であのころはまだ朦朧としていて変でした」とおっしゃるがしっかりとした何時もの作者の筆跡の便りであった。「全麻」という言葉が一般に通用するのかとも思ったが、医師である義息と同居されているご家庭であるからこそ「全麻」が通用すると思い、このままで採用させていただいた。初めて全身麻酔を受けられた作者には「未知の世界」であり春の闇にどんな幻想が浮かばれたのかゆっくりお話を聞きたいものである。二句目「燕がいのち運び来る」の措辞が抜群。今回投句された七句は、はじめての体験を感情に溺れずうまく詠いあげられたと感服した。（以下略）

PDF= 俳誌の salon